
＼M!RaCle G!RL！／

ジェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＼M!RaCle G!RL!／

【Nコード】

N0812W

【作者名】

ジェル

【あらすじ】

萩原陽埜は、いきなり暗殺者とかマフィアとかを育成する超デンシャラスな聖セレスティナ学園に放り込まれた。しかも、極悪を取り締まるとかいう、極悪な生徒会に無理やり加入させられて、極悪人と戦う羽目に。モットーは”安心をあなたに！清い裏社会をお届けします、生徒会です”

死んじゃうといくら私でも！だいたい、なによ生徒会って！デンジャーでクレイジー野郎な変態を集めただけじゃん！生徒会の仕事を手伝えって？悪を懲らしめろって？ヤクザに悪もくそもあるか！私

にとっての悪はお前らだよおお!! 私、あなた達と絶対関わり
たくなかったのにいー! ちよっ、離せ!! 黙れ!! 近寄るなあ!!
死ぬのは嫌だし、でも言いなりになるなんて死んでもごめんだわ、
な最強主人公がお送りする、ドタバタラブコメディ!!

多分、逆ハーレム構成します。なんでもありな能力あります。とつ
ても、ご都合主義です。

編入

しゅたん、と軽やかな足音を響かせて、彼女は地面に着地する。顔を上げて見据えるのは、彼女の登場に驚いた顔をすぐに引き締めて銃を構えた厳つい外国人男性。

「……みいつけたっ」

色素の薄い瞳が三日月形に笑み、柔らかそうな栗色の巻き毛が肩の上でふわりと揺れた。

守ってあげたくなくなるような華奢で可憐で清楚な超絶美少女。

それが、まさに彼女を表す言葉。ただし、外見だけであるが。

案の定、彼女はゆっくりと口角を上げて、ふわふわの桃色の唇から有り得ない言葉を吐き出した。

「さっさとくたばれよお！この猥褻物があー！！」

ドォン！！

差し向けた手のひらから放出された凄まじい衝撃波が、それに対

抗して撃たれた銃弾をも弾き飛ばして彼の身体を貫いた。

衝撃波により空気が凄まじい砂埃を上げる中、彼の身体が力なくへたりと地面に落ちた。

しかし、”猥褻物”が息絶えたことの彼女の仕事柄重要な確認もせず、くるりとその場に背を向けた彼女は、気だるげに髪の毛をかきあげた。

「弱えなあ」

*
*
*

——— 聖セレスティナ学園。

マフィアやスパイ、暗殺者を育成する、国が黙認している裏社会を代表する登竜門。

表向きは超お嬢様お坊ちゃん学校であり、偏差値も高いため、

一般的に簡単に入学できないと思われる。

学園は、2100平方キロメートルの広さを誇っており、その面積のほとんどが実戦経験を積むための練習場として存在している。

香川県の広さが1875平方キロメートルであるからして、聖セレスティナ学園の巨大さがわかりであろう。

2100平方キロメートル全てが、50メートルの外壁で囲われており、聖セレスティナは登校時と下校時以外は、外界から完璧に遮断されている。

さて、そんなに広いと移動やばくね！？と思われた方。ありがとうございます。誠によい質問です。

聖セレスティナ内は、所々に高頻度で設置されているエレベーターのような箱で地下を高速で移動できる（エレベーター内の液晶パネルに、行きたいエレベーター設置場所をタッチすると、指定先に1分と経たずに到着する）ため、心配ご無用なのだ。

聖セレスティナ学園には、所謂能力者と呼ばれる者も通っており、その者たちもあわせて、実力で細かくクラス分けと、ランク付けがされている。

ちなみに、聖セレスティナ学園の”聖”は、”せい”ではない。”ひじり”と読む。

――…さて、そんな聖セレスティナ学園に、本日一人の編入生がやってきた。

彼女の名は、萩原陽埜^{ひさの}。

先程の、女性とは到底思えない言葉遣いをした美少女である。

聖セレスティナ学園の正門の前に少し落ち着かない様子で立ち、軽くジャンプしてスクールバックを肩にかけ直す。そして、着慣れないブレザーの首もとをしきりに気にしている。どうにも、リボンの角度が気に入らないらしく、引っ張ったり左右に揺らしたりして、ようやく領いた。

そして、深呼吸を2回…3回…5回…8回。少し泣きそうな気持ちを引き締めるため、唇をきゅっと噛み締めて、両頬をパチンと叩いた。

「頑張るぞっ！」

うしっ、と気合いを入れて、陽埜は聖セレスティナ学園のインターホンを押した。

* * *

「萩原陽埜。17歳。今までニューヨークに滞在しており、実戦経験も豊富。能力あり」

空間パネルを操作しながら、深い碧色の髪をした整った容姿の、さわやかな印象を与える端正な顔立ちの男は楽しげに言う。

「かいちよーお、それ今度の編入生？」

彼の後ろから、パネルを覗き込んだ茶髪の少し幼い印象の彼に、会長と呼ばれた男はうんうん、と頷いた。

「わ、超美人じゃん！やった！」

パネルに表示されている履歴書の写真に、茶髪は大きな目が特徴的な可愛い顔顔を綻ばせて嬉しそうにはしゃぐ。

「まったく、てめえは変態かよ」

呆れたように茶髪を見やるのは、黒髪に赤いメッシュが入った少し厳ついながらも整った顔付きをした男。

「瑠架が変態とか今更だろ、燈眞」

そう言ったのは、金髪を靡かせる、どこかの貴公子かのような綺麗な顔立ちの男だ。

燈眞と呼ばれた黒髪メッシュは、その言葉に何か遠い目になって、はあ、とため息を吐いた。

どうやら、茶髪の瑠架という男の、過去の変態行為に思いを馳せているらしかった。

「え、俺そんなに変なことしたことある！？　ねえ、柚生！？」

燈眞の感慨深いため息に、瑠架が金髪に聞く。

柚生という金髪は、冷たく瑠架をみやり、よく胸に手を当てて考えてみるんだな、と言った。

「うわぁぁん！かいちよー！」

いじめられたー。と、会長に抱きつけば、よしよしと頭を撫でられて満足げだ。

「で、その萩原なんたらがどうかしたのかよ」

燈眞が会長に問うと、会長は意味深に笑った。

「お楽しみ。」

*
*
*

▼ 陽埜 side

——— 3日前

ガタガタと揺れるレトロな列車の中で、私は今朝母親から送られてきたパンフレットをめくる。

『仕事お疲れ様。

お願いがあるんだけど。ね、陽埜。明日から学校に行ってみない？』

受話器の向こう、軽いノリで話された。

もちろん、拒否した。

断固、拒否した。

こいつが、未だかつて私にプラスになる提案をしてきたことなど一度もない。

しかし、うちの母親が私の拒否権なんて認めているはずもなく、”お願い”という名の”命令”は、決定事項として私に告げられた。

『陽埜は勉強できるけど、人生それだけじゃないのよ。それに、ほら、暗殺の基礎的なこと学びたいって言ってたし、丁度いいと思うの。明日、パンフレットをホテルに送るわ』

ニューヨークで一般人として通っていた学校には、すでに退学届けが提出されていて、母親の手際の良さに泣きたくなった。

まあ、確かに私は戦闘専門で、それしか勉強していないから、日本で一級の暗殺について学びたかったのも事実だ。

だから、日本に帰国することについては賛成である。

でもなあ。

学校に通う必要がわからない。しかも、高校生レベル。

加えて、あの母親が進めてくる学園がまともなところだと思えない。

今の所、パンフレットをみる限り、ただの超金持ち学校だけど、面積がはんぱじゃない。いくら金持ち学校だからって、普通に暮らすのにこんな面積使う？金持ちの神経って信じられない。

それに、聖セレスティナ学園って、仕事関係でできたことがあるような気がするんだけど…、気のせいかな。提案された仕事内容が、この学園に通ういけ好かない金持ちの抹消とかだったのかな？うーん。なんだか違うかった気もするけど。まあいいか。

だいたい、日本語なんて滅多に使わないから下手になってきてるし、いきなり日本に帰れて言われても困るのよね。……ちよっと、今思うと、母国語をしゃべれないって、けっこう深刻じゃない？

ま、まあ、気を取り直して、真面目に手元のパンフレットに目を向ける。

豪華な校舎の写真がところ狭しと貼り付けられていて、食事はミシュラン三ツ星のシェフがどうたらだとか、世界で最大級の広さを誇るだとか（↑当たり前だろ）、校舎は伝統的な建物でありながら、清潔感溢れるだとか、世界一綺麗な校舎に選ばれたとか、学生はみな礼儀正しく勤勉で、粉かなクラス分けで一人一人の実力にあわせて授業をしているとか、私にとってはあまり魅力的に感じない言葉たちがずらずらと並べたくられていた。

そのとき、パンフレットの間から、ヒラリと封筒が落ちた。

誰からかと、裏返すと母親の名前が。

全くいい予感がしない。

嫌々ながら封を切り、中に入っていた手紙を読んで――…

「うそおおおお!?」

私は絶叫した。

そうだ。そうだ!

きいたことがあるような気がしたのは、金持ちの抹消なんかじゃない。

ここが!

あの”聖セレスティナ学園”か!

日本の裏社会を牛耳る統領とかマフィアとかスパイとか暗殺者とかを育成する、超恐ろしい場所!

厳めしい男が溢れかえり、殴り合いなんて日常茶飯事、あわよくば殺っちまえ!精神の地獄のような場所!

そんなデンシヤラスプレイスに私を放り込むつもりなのか、あのババアは!?

いや!無理だから!!

絶対生きて卒業できない。もはや、入学した途端に私は昇天するかしらん。

うわ、最悪。泣きそう。

まだ17歳なんですけど!まだ生きていたいんですけれど!切実に!

命の危機を感じた私は、貪るように母親からの手紙を読み進める。

なんでも、この学園には、逆らってはならない超危険人物がいるらしい。

私はそれを、死ぬ気で頭に叩き込んだ。

そして。

やってきた本日、編入当日。

「はじめまして」

校長室にやってきた私は、白髪混じりのおじ様にとびっきりの笑顔でご挨拶。

じろり、と私を見た校長の目に、私はピキリと固まる。

……この校長、すごい強いぞ。

雰囲気、熟練者だ。もし、任務中に会ったら、確実に泣いて逃げるレベルに強い。今まで会ってきた中で、きっと一番強いんじゃないだろうか。

うわああ！殺さないで！！

どうか、殺さないでええ！

ちよつと涙目の私は、今にも挫けそうな心を叱咤激励して、もう一度校長の目を見据える。

「今日編入する予定の萩原陽埜です」

はい。

これしか言うことないです。

困った。困ったな！

何か言って下さいな、校長お！！

こんなことなら日本語の勉強を、もっと徹底的に理解し直すん

だった。

ほんと、殺さないで。

お願いだから。

怖さにぎゅっと身体を縮めた私の耳に。

「よくきたな」

それはそれは、優しい声が届いた。

………ん？

さて、ここには私と校長しかいないわけだが…、

この声は、このガチ強そうな（まず眼力が常人じゃない）校長？

もう一度、校長をじっと見つめる。

確かに、眼力はとても恐ろしい光を放っている。でも、その奥に、暖かいものが見えて、思わず身体力が抜けた。

なんだ、そんなに緊張することなかったんだ。校長は強いけど、きつとその分いい人だ。

「聖セレスティナ学園の女子はたったの1割しかないが、君がみんなと仲良くなれることを祈っているよ」

……こ、校長おおお（；O；）・。。！！

「この学園は、大概普通の学校と変わらない。何事もなければ、みな普通の学生だし、普段は真面目に勉強をしている。奥の奥は別と

して、柄も悪くない」

私は、その奥の奥が大事だと思うのです校長。

……言えないけどさ。

まあ、裏にどっぷり浸かってる私が言えたことじゃない。

「ただし、喧嘩になった場合は、殺し合いだ」

はい、肝に銘じます。

こくこくと凄い勢いで首を振って見せると、校長は軽く頷いて続けた。

「その場合は、君も本気で殺ってくれてかまわない」

さっきから気になってたけど、やるって字、間違ってますん？

……って、いやいや、現実逃避してる場合じゃなかった。

これは、ちゃんと聞いとかなないと、死ぬ。確実死ぬ。文字通り死ぬ。

「だが、決して逆らってはいけない者が、いる」

はい。その通りです。

この萩原陽埜、彼らの名前から家柄、さらには身長、血液型まで調べ上げ、そして死ぬ気で覚えました。

まあ、プライベートな部分は、口にするのを控えましょう。……
……え？何でって？だって、まだ死にたくないから！

・ 山吹 紫苑 しおん

表向きは大手製薬会社、実は日本の裏社会のトップの山吹グループの御曹司様々。長男。

カリスマ性が半端なく、ヘタなことをしない限り誰にでも分け隔てなく優しい。家柄が怖いだけで、みんなに慕われているので、生徒会長を務める。

容姿端麗、眉目秀麗。運動神経もよろしい。ただ、言っとくが、日本で最もデンシラスパーソン。

・ 佐久良 瑠架 るか

やり手の情報屋で、かなりの権力を持つ佐久良家の3人兄弟の末っ子。

可愛い容姿と末っ子気質の甘えん坊さで、女子から男子から（！？）絶大な人気を誇る。

しかし、可愛い見た目に騙されてはならない。情報屋であるので、敵に回したくない男ナンバーワン。

どうしてか、彼が副会長。

・ 木ノ内 燈真 とうま

由緒正しきヤクザの木ノ内家長男。つまり、どでかい日本庭園とかついている日本家屋に住んで、若様とか呼ばれちゃってるような感じ人。

こいつも、顔よし頭よし家よし。クールで強くて、憧れる！と、男から大人気。

厳ついくせに、書記なんかできちゃうような男。

・ 安斎 柚生 ゆずき

近頃、急速に力を持ち出した安齋家の次男様々。

安齋家は、表で外資系企業をしているが、裏ではスパイを派遣する家業を営んでいる。

柔らかい物腰と優しい喋り方、王子のような容姿も相まって、女子からキャーキャー言われる。

会計を務める。

そこまで反芻すると、全身に寒気と震えが走った。しかもこいつら、全員能力者。おっと、怖いね。つつい神様を恨んじまうね。

「4人には、絶対！近づきません！！」

私は俄かに叫んだ。

よしよし、と少し口元を和ませた校長は、次の瞬間、信じられない言葉を発した。

「よし、じゃあ集会に行こうか。全校生徒、集まってるよ」

眩暈がした。

校長。

ヤクザの皆様方に向かって、私に自己紹介しろと言うのですか？
いや、あの。失神しちゃいますよ。私。

編入 2

数百の鋭い眼光が、ビシバシ突き刺さる。怖い。

何故、私がこんな目に。
よよよ。

見た目、いいとこの坊ちゃんばかりのくせして、何故雰囲気
こんなに怖いのだ。

ギャップか!?

ギャップを狙っているのか!?

すまんが、萌えゝ（はあと）とか言わんぞ!?

つい、視界が滲むけど、この裏社会でそれなりに活躍してきた萩
原陽埜、な、ななんのこれしき!!

踏ん張って、校長の隣で微笑む。

「今日、編入してきた萩原陽埜さんだ」

少しざわついているが、特に身の危険は感じない。良かった。心
の底から良かった。

密かにほっとため息をついたのに。

「SSクラスに入ってもらおう」

校長がそう告げた途端、ざわりと空気が蠢いた。

ひいいい。

殺気だよ殺気!!

ここの学生、総じてカルシウム不足じゃないのか!?
何故、突如私をそんな視線で射殺しそうな目で見る!?

「校長お!」

突如、野太い声が上がり、一本の腕が挙げられた。

「なんだ?」

全く動じず、校長は尋ねる。

「何故こんなガキがSSなんですかあ!」

その言葉を聞くや否や、全員が大ブーイングを始めた。

「SSに入れるくらい、強いやろなあ!!」

「誑かされてんじゃねえぞ校長!」

「俺らもSSに入れろやああ!」

何この尋常じゃないSSへの執着!

こーわーいーよー!

お母さん助けてっ!

何故私はこんなにも、編入の挨拶で殺意を剥き出しにされているのですか!

私が何をしましたか!!
ニューヨークに帰りたい!
逃げ帰ってえよ!

「……校長、SSクラスって、」

「学園のランク付けの最上位だよ」

しれ、と言う校長に、思わず殺意が湧いた。
てめえのせいじゃねえか、おどれええ!!

何故! そんなところに入れようとする!? 一体何故?!?
全く知らなかったのよ、みなさん! 聞いてっ!

私は、静かに教室の隅っこで卒業を待っただけの、穏やかなスクー
ルライフを送りたかったんだよお!! S Sなぞ、こっちから願
い下げじゃあーっ!!

危険人物だけでなく、クラス分けやランク付けについても、調べ
ておくべきだった。

萩原陽埜、一生の不覚。

そのとき、ハッとした。

——— 最上位がSS。

ということとは。

あの、デンシヤラスパーソン×4も……

そのときの私の顔は、恐ろしいことになったのだと思う。
騒がしく異議を申し立てていた彼らが、一瞬静まり返った。

「私、Gクラスがいいです！」

校長に、必死に言った。

怖い学生さんたちの面前とか、そういうのを考えられないくらい、命の危機を感じていた。

「すまんが、Fクラスまでしかない」

いや！

その返答間違ってるよ！

校長は私が嫌いなのかい！？

「Fクラスでいいじゃん！」

タメ口で叫んだ私に、有り難いことにヤクザさん達が同意してくれる。

「SSなんてありえねえ！」

「本人がFでいいってんだぞ！」

「Fクラス！」

「Fクラス！」

なんか、こうもFクラスFクラス叫ばれると落ち込んでくるから、人間で不思議。

だって、弱いつて叫ばれてるってことだもんね！いいけどね！
デンジャーな人たちと机並べるよりか、全然いいけどね！

校長の腕にすがりついて、お頼みしていると。

「うるさいよ」

涼やかなよく通る声が、響いた。

決して大きな声ではなかったのに、あのうるさかった体育館が一瞬にして無音になった。

何？

何が起こるのでござすか。

いかん、落ち着け自分。

「今日は編入生挨拶なんじゃなかった？」

その声は、いい感じの重低音で…なんか、こう、腰にクるような”いい声”だ。

…ってこら自分。

何を血迷ったことを。

どこからだ、と辺りを見回すと、奥のほうの列が割れるのがわかって、そこに人影が4つ見えた。

…………… まさか。

サアア…と、顔から血の気が無くなるのがわかった。

…………… まさか！

人だかりの切れ目は、どんどん迫ってくる。

人影が、迫ってくる。

危険人物が、迫ってくる。

デンジャーが、迫ってくる。

死んでしまう。

死ぬ…！

パニックを起こした私の頭は。

更にショートを起こして、爆発して煙を吐き。

「い、イヤアアアアアアア…！！！！！！」

脳内会議の末。

逃亡せよ、との決断を下した。

が。

校長に手首を掴まれた。

「あだっ！？」

嘘だろ！？

痛いっ！

痛いっす校長！

ギリギリと手首を握られて、私は涙目でそれを振りほどこうとする。

お、お願いだから！
離して校長おおお！

てか、握力強すぎるんですけどもおお！ このクソジジイ！！

「やったあー美人だー！」

校長を信じられない気持ちで見つめる私の耳に、この場に似合わない、脳天気な可愛い声が聞こえてきた。

へ？

きよとん、とそちらを見やると。
すぐ近くに、にこり、と笑う美少年が。
思わず和んで、にこり、と笑い返す。

…………… て、いやいやいや！
いやいやいやいやいや！

後ろに見えた3人で、彼の正体に思い至り、頭が真っ白になった。

来た――――――っつ！――！！！！！！！！

ふらり、と身体が揺らぐ。

南無阿弥。

神よ、あなたは私を見放したのでございますね。

まあ、裏社会で殺しをしているのですから、あなたが私を好きなのは、思っているに過ぎないと思いますけれども。

「：瑠架。怖がられてるぞ」

「ええっ！俺が！？」

「俺が？、って：どんだけ顔に自信があんだよ：」

「もうほっとけよ、柚生」

失神してしまえば楽なのに、できない自分の図太い精神。

日本で一番デンシヤラスな4人が、私の目の前に。

調べすぎて、逆に後悔している。この人たちのことを、普通のヤクザ様だと思っていたほうが、幸せだったかもしれない。知らぬが仏。泣きたい。

そのとき、すいっと手のひらが差し出された。

な、なんだ！？

麻薬取引か！？

びくつと後ずさる私に、苦笑しながら、

「俺が生徒会長の山吹紫苑。君には生徒会秘書をやってもらおうことになった。これからよろしく」

和やかに、かなりフレンドリーに。危険人物だと微塵も思わせない仕草で、彼は言った。

あの。

これって、つつこんでいいところですよね？

「……あの…誠に申し訳ないのですが…、質問をさせていただいても…？」

「どうぞ？」

首を傾げながら、山吹紫苑生徒会長様は、少し微笑む。

「生徒会秘書という役職を…私、今まで生きてきて聞いたことがないのですが……」

校長の影に、そろりそろりと隠れながら問うと、会長様が差し出していた手を引っ込めて愛想笑いをした。

いやいやごまかないでよ！？

私の思いが通じたのか、生徒会長様の隣にいた金髪の、恐らく安斎柚生生徒会会計様だと思われる方が、微笑と言う名の苦笑をこぼしながら言った。

「だって、今朝、紫苑が考えた役職だからな」

は？

ええと、いくらそんなふわりとした優しい声だからって、受け流すことは出来ませんよ。

「普通、副会長がする仕事を秘書にやらせてもらうことになった。瑠架じゃ話にならんからな」

興味なさげに明後日の方向を見ながら説明して下さったのは、木ノ内燈眞生徒会書記様だと思しき黒髪に赤いメッシュが入ったお方。なんというか、深みのある声で、生徒会長様とは違った”いい声”で……って、しっかりしろ自分。強く生きるんだ。

「ちょ、ちょっと待って下さい。何故私が？編入してきたばかりの私より適任な方はたくさんいるかと——」

「明日から仕事してもらうから、朝7時、生徒会室に来てね」

私の言葉を遮って、意見など聞きもせず、生徒会長様はひらりと手を振った。そのまま、体育館の出口へ颯爽と歩いて——

って、ちよつとこら！

「無理ですっ！私——」

「待ってるからねっ」

またしても私の言葉は、佐久良瑠架生徒会副会長佐に遮られて、

「私行きませ——」

「第1別館の5階だぞ」

またまた楽しそうに笑う安齋会計様に遮られ、

「あ——」

ぽん、と肩に置かれた手。

木ノ内書記様には、しゃべらせてすらもらえなかった。

う。

嘘だろおおおおおおお！

*
*
*

「はじめまして、先ほど集会でご紹介頂きました萩原陽埜です」

あれから、校長にSSクラスに案内された。

が、SSクラスからの視線はあまり好意的なものではなかった。特に女子。

—— イケメン揃いの生徒会。

それは、女子の憧れの的なのだ。なのに、編入早々、生徒会長様直々のご挨拶。並びに生徒会への勧誘。

…… うん。そりゃ好印象なわけないな。

デンシヤラスな弊害が、こんなところで発見されるとは驚きだ。

SSクラスの人数は、10人。

SSに入れる程の実力があるものが、少ないらしい。

ということは、ここにいるのはかなりの実力者ということだ。

…… 恐ろしい。

さっき、ここに来るまでの道のりで校長に説明してもらったのだが。

この学園は、 $SS > S > A > B > C > D > E > F$ とクラス分けされており、これは戦闘能力と偏差値、統合しての実力が高いものから、相応しいクラス入れるようになっているらしい。

戦闘能力と偏差値の統合した、その人の実力をはかる物差しとなる値のことを、倫理学において徳・優秀性を表すアレテーから、アレスと呼ぶらしい。

各クラスにはアレスの基準値というのがあって、ある人のアレスを x とすると、

S	S	$x \leq 1500$
S	1500	$x \leq 1200$
A	1200	$x \leq 1000$
B	1000	$x \leq 800$
C	800	$x \leq 600$
D	600	$x \leq 400$
E	400	$x \leq 200$
F	200	x

となっているらしい。

そこで、廊下での校長との会話を思い出す。

私、自分のアレスとか知らないんですが。
1500以上あるのですか。

不安になって校長に問うと。

「君は能力者だし、それにニューヨークでの活躍も知っている。アレスを測らなくても、SSランクであることは間違いない。二つ名もあるだろ？ほら、あの…」
カラミティ・レイ・エム
「七番目の災厄」だっけ？」

……………。

……………

……………

ぎゃっ!?

な、なぜその生き恥のような二つ名を!?

「たしか、ほかにもあったかな？ゴシックカー――」

「ギャアアア！！　もうそれ以上は言わないで下さい！」

「はっはっは」

はっはっはじゃないっつうの！

「どこでその恥ずかしい名前を！？」

「……ヒ・ミ・ツ」

ジジイとの秘め事なんていらねえよ！！

何ちよっと恥じらってんだボケえ！

最初の恐ろしさは、いずこへ。腸が煮えくり返る気持ちで、私は校長に口止めた。

あんな人生の汚点とも呼べる恥ずかしい名前が知られたら、私腹を切って死にます。

いいと思うけどな、と呟いたジジイのスネをしこたま蹴りつけた。人の気も知らないで。あんな厨二な名前！恥ずかしすぎるわ！二つ名、という時点で恥ずかし死にするわ！

「まあ、今日は授業にならんだろうが。頑張れよ」

校長は、親が子供にするように、ぽんぽんと私の背中を叩いてSクラスに送り出してくれた。

校長が何を心配したのか、まあ、ちゃんと授業になってるんだけ

ガッシャー——ン！

「萩原陽埜おお！ツラ貸せやあああ！！！」

.....

.....？

.....あ。

.....私かΣ（□。；）！！！！

それは、SSクラスのみんなの視線の先を辿って、縮こまる私の机へやってきた。

「.....」

どうやら、豪快に扉をぶち壊し、SSクラスに乗り込んできたのは、Sクラスの男子たち。

何故わかるかって？

それはね、ブレザーの襟元に”S”ってバッチが取り付けられているからだよ。そう！ランクのバッチを襟につけることになっているんだ。ちなみに、私の襟にはSSってバッチが煌めいて——

「聞いてんのかゴラァ！！！」

—— いるんだよ！

みんなSSのバッチがつけたくてたまらないみたいだね！SSはもはや、かっこいい人のステータスなのだっ！

：すみません。現実逃避ができません。Sクラスの皆さんの形相がまさに鬼のようで、チキンな私を許して。……え？チキンが殺人なんかできるかって？そこは触れちゃいけないよ、お嬢さん。いい女ってのはさ、そういうのをそっと見守るって相場が決まってるんだぜ☆

……限界です。

仕方ない。厳しい現実と向き合いましょう。

見上げると、20人くらいを引き連れた、目つきのわるいながらに美形な男子が立っていた。私より頭一個分高い位置にあるキャラメル色の髪を苛立たしげにかきあげて、彼は私にガンを飛ばしている。みんな制服はキレイに着てるし、見た目ほんとエリートな坊ちゃんなのに……。無駄にしてるよ！そんな怖い顔して、人生損してるよ！

やべ、死ぬわこれ。

荒事起こしたくないのよ私。 そんな怖い人種の方々と。

「はじめまして、萩原陽埜です。私に何かご用ですか？」

にこっと、笑顔で私は尋ねる。

私は、あなたがたと問題を起こす気は皆無です。ヤクザとか、怖すぎて私はもう……。

フレンドリーな私に、彼はあからさまに狼狽えた後、

「流雅だ。Sクラスと戦え」

言ってくれやりました。

ああ！もう！！

私はヤクザ様とお関わりになんてならない、平凡な日々を送りたいのに！

編入 2 (後書き)

お気に入り登録ありがとうございます！

二つ名は、二つ名メーカーとやらで検索して決定いたしました笑

編入 3

身をさすような冷たい風が吹いた。無意識に身体が震える。
辺りは色を無くし、物悲しく感じられる。

何故だろう。

そんな季節ではないはずなのに。

……ああ。そうか。

ある可能性に思い至った私は、ふふ、と儚く微笑むと、目の前の
人物を見つめた。

——— 今、私が生命の危機に瀕しているからか。

なあんで、ちょっとしんみり語ってみたけど！語ってみたけれど
も！

嫌だ！

冗談じゃないわよ！

こんなか弱い乙女（今、誰がって言ったやつ出てこいや）を校庭
に呼び出して！

決闘するとか言って！

私1人对Sクラス総勢25人だなんて！鬼！悪魔！

一応闘うのは一人ずつってたって、何の慰めにもならないわよ！！

しかも、野次馬は全校生徒！

わては見せ物とちゃうねんぞ！！

でも。

そんなこと言えません。

ヤクザ様にそんなこと言えません！

「お前に勝ったやつは、SSにあがれるとの条件を校長に取り付けたきた」

Ｓクラスの代表らしい流雅という人物のその言葉に、Ｓクラスが雄叫びをあげる。

なにやってくれとんじゃあのハゲえええええ！！！！！！！！

てか、だから何なんだよお前らの異常なSSへの執着は！？

俄然やる気に漲った彼らに、思わず顔が引きつる。

「まずは俺が行く！」

挙手しながら高らかにこちらへ一歩踏み出して来たのは、見るからに屈強な男だ。

げえええ。

野次馬たちは、私と彼を取り囲むように円形に距離をとった。

ほんとにやるのか…。

「よろしく。海だ。手加減はいるか？」

彼は、断絶勝つつもりのようなのだ。だが、いたずらっ子の少年のように笑ってみせるので、不快さを感じさせない。イントネーションも冗談のような軽さ。

でも、それが逆に私がこの決闘から逃げ切れないってことを知らしめているようで、眉を寄せた。

はいはい。やってやるわよ。

やればいいんですよ！

「萩原ですよろしく。手加減は必要ないわ。殺しはあり？」

同じく冗談めかした私のその発言に、笑いが起こる。

「殺しはなしさ！」

「新入りの恒例行事ってやつだからな！」

「相手の実力をはかるだけだぞ！」

親切に答えてくれる野次馬に、ちょっと気分が楽になる。

でも。

「びびってんじゃないぞ！」

「命が惜しいって？」

「殺されたくないか！」

見た目は完璧エリートのかげに、最後のほう、そこなへんのチン

ピラと変わんねえ発言をしているヤツがいるじゃないか。上がった気分が、急降下。

そっと、下品な笑い声が聞こえる方を伺えば、EやFといったバッチが見受けられた。

クラス分けって、人間のランクでもあるのかな、あれ。

なんて、漠然と考えていると、

「まあ、真剣勝負だ！両方本気で行くか！」

心底楽しそうな声が。

そちらを見やれば、対戦相手は、ニカッと笑ってみせた。

なんだか、気持ちのいい人間だ。ヤクザ様なものにな。

ちよっと笑って、私も頷いた。

「もちろん！」

途端。

相手がすっと腰を屈めた。そして私は、衝撃波を生み出そうとして……。

あれ。

これって、能力使っているのか？

……………。

ぴんちだっ！

「能力はあり!?!」

とっさに叫んだけれど間に合わず、返答が返ってくるまえに、彼が肉薄。

咄嗟に彼から突き出された拳を掴んで、それを引き寄せ、バランスが崩れるのを予想して足を払おうとしたが、逆に掴んだ手を利用されて、身体を捻り飛ばされた。

ちっ。くそ、体格差がありすぎる。

飛ばされながら、空中でぐるりと一回転して着地する。

砂埃が舞う。

スカートを叩いて、海に向き直れば、海はやっぱり楽しそうに笑っていた。

でも私は、そういう体で戦うの苦手なのだ。能力を使ってもいいのか、聞かなくちゃ! なのに、

「なかなかやるな!」

そう言うが否や、彼はまたもや突っ込んできて――

「ちょっと待ったあああ!?!」

ドシュっ!!

「ボベバ!?!」

あ。

……………すまん。

空を仰いで、上空20mを飛んでいく海に謝った。

ほんとすまん。衝撃波出してしまつて。で、でも一応咄嗟だったけど、手加減したよ？空気軽くしたよ？……………いや、でも、なんかごめん。

ズサアア…

地面に叩きつけられた海は、カクンと力なく首を傾けた。

……………死んでないよね!？

—————しーん。

静寂。

神様、地球ってほんとうはこんなに静かだったんですね。ははは。やっちゃったな、おい。

だから、突然響いた歓声にびっくりした。

「お前能力者だったのかよ!？」

「俺とも戦ってくれ!」

「すげえなあ!」

「あの海が吹っ飛ばされたぞ!」

「次は俺が!」

「何の能力なんだ?」

「いまの何を出したんだよ!」

「いや、あの……」

「強いんだな!」

「やっぱりSSってことか!」

「なあ、アレスはいくらなんだ?」

「やべえな!」

「なあなあ、どうなってんだ!？」

「……ほんと、すみませんでした!」

居たたまれず、逃亡しようと空気で体を浮かせたら、一斉にみんなが逃がすか!とばかりに飛びかかってきた。

「ぎいやあああああ!?!?!?!」

足を掴まれて、地上に降ろされる。嘘でしょお!危ない危ない!いや!危ないつつつてんだろ!って、どこ触ってんだよ!?

「はあなあせ!!!!!!!!!!」

「ごお……っと、傷つかない程度に空気を凝縮させ、四方に発射させる。」

「「うおっ!!」「」」

足やら手やらを掴んでいた人たちが吹き飛ばされて、自由になった私は彼らを踏みつけて走り出した。

「待てーっ!」

「捕まえろおー!」

復活速いな!流石ヤクザ!!
って、お前ら足速っ!

「イヤアア!!!!!!!!!!」

ヤクザ様に集団で追いかけられるなんていう貴重な体験をさせて
いただいてありがとうございますハゲジジイ!
くそっ!後で覚えてろよ!!

でも、教室に逃げても人はいないし、助けてもらえる可能性のある、ここでの唯一の知人は校長だけだ。……あれ、目から汗が。

「助けて下さいっ!!」

ぜえぜえ、と肩で息をしながら、私は校長室に飛び込んだ。
しかし、中はもぬけの殻。
誰もいない。

うそーん！？

あいつ、最強に使えねえ！！

「はっはっは、さあ、俺と戦ってもらおうか」

「…………くっそ」

振り向けば、流雅が嬉しそうに笑っている。
そんなに私と戦いたいのかよ！？

「追いつめたぞ」

わざわざ言わんくとも、わかっとなるわ！

じりじりと寄ってくる流雅に、私はじりじりと後退。
とん、と足が校長の机にぶつかった。

キラキラした目で迫る彼らに、視界が滲む。

ああ、嘘っ！何故涙などっ！

泣いちゃだめよ、私！頑張っ！だ、大丈夫よ！

新入りの恒例行事だって、実力をはかるだけって言ってたじゃないか！！

天井に吊されて車でぶつかられたりとか、怪しい薬をかがされたりとか、バラバラにされて海に沈められたりとか…、コンクリートに…潰けられたり…とか…うつ、…………何故私がこんな目に…

…。

「えっ、おい、泣くなよっ」

「……………は!？」

瞳が潤みだした私に、流雅がびっくりして、慌てたように言う。
手をおろおろと動かして、慰めるかのように近寄る。それに、びく
つと身を縮めると、彼はそれ気がついてぴたりと歩みを止めた。

「な、泣いてないわよっ」

ぐいっ袖で目をこするが、逆にぽろっとながこぼれた。

「い、いや…泣いてんじゃん…」

「…もうっうるさいな!こっちだって泣きたくて泣いてんじゃない
わよっ」

羞恥から思わず怒鳴ると、困ったように目尻を下げて、子犬のよ
うな可愛げな表情になった。

「す、すまん。俺ら、強いやつ見ると、もうどうしようもなく身体
が疼いて、戦いたくなるんだよ。怖がらせるつもりはなかったし、
みんなで戦えば、楽しめるかなと思ったんだよ」

しょぼん、という擬態語がぴったり当てはまるその様子と言葉に、
私は拍子抜けした。
もしかして。

いや、もしかしくても。

ヤクザ様だっていう先入観で、遠ざけて無駄に怖がってたのは私で。

ただ戦いたいだけの悪意のない彼らにちゃんと気がつけなかったのも私で。

壁を作ってヤクザ様は敵で私とは違うんだって思い込んでいたのも私で、…

なんだ。そうか。

悪いのは私だったんじゃない。

それに、新入りの恒例行事ってヤクザ様という歓迎会のようなものじゃないだろうか。

ヤクザ様なんだし、口が悪いのは当たり前だ。きっと、そんな言葉遣いしか知らないに違いない。

「…はははっ」

そう思うと、なんだか心が軽くなって笑えてきた。
なーんだなんだ。

ははは、みんな、私と仲良くなりたいのね！（笑） 全く不器用さんなんだから、仕方ないわね。なんて、ちょっと強引に考えてみると目の前の彼らが可愛く思えてきた。必要以上に怖がることなんてなかったんだ。そういえば、私はここにきて何もされてないじゃないか。

「ううん、私が悪かった。ごめんなさい」

そう言うと、流雅は驚いたように私を見た。

「じゃあ、続きをしてくれるのか…!」

「だが断る!」

私は、すっきりした全開の笑顔で言いきった。いやー、憧れのセリフをここで言えるとは。

一瞬固まった後、流雅は不満げにええーと口から漏らした。ぱんと手を併せて、拝むようなポーズをとってみせる。

「頼む! やろうぜ!」

「だーめ」

「そうよ、だーめ…って…え?」

突如。

誰もいないはずの私の後ろから聞こえた声。

え”。

ピシリと固まった私の肩に、ふわり、と二本の腕が後ろから巻きついた。ふわり、ところなしに柑橘系の甘い香りがする。

くす、と耳元で笑い声。

ゆうれい!?

ガタガタ震える私に、流雅の顔が強張った。
やっぱ幽霊なのか?!

「こんなに怖がってるよ?」

私の左耳に、さらりと柔らかな髪の毛が触れる。
その甘えるような声は、どこか聞き覚えのあるような…。

「瑠架さん」

控えめに呟くように言った流雅のその名前に。

……………え”。

私は、また別の意味で体が震え出すのを感じた。

ア——メン!!!!!!

助けて先祖さま!

瑠架さんって…!

瑠架さんって…っ!!

デンジャラスパーソンその式、佐久良瑠架じゃないか!
そうだ。そうに違いない。

だって、彼の能力は、テレポートなのだから!

ああ、眩暈が。

「やほ、流雅くん」

振り向けない。

振り向けない。

いや、無理。

さっき先入観で人を判断するのはダメだと改心したばかりだ
けど、さすがに、さすがに…っ! いきなりデンジャラスパーソンは

難関すぎだよっ！　だって、デンジャラスパーソンだよ？！　略してデンソン！　……なんだかジェysonっぽくて余計恐いよーっ！！

「萩原陽埜ちゃん」

ああ、やめて。呼ばないで。

私は目をぎゅっと瞑って、両手を組み合わせる。

「陽埜ちゃん？」

「……は、はいっ」

こんなことなら、Sクラスと決闘のほうはまだマシよー！

「やっぱりこれから生徒会室に来て？」

……………ごーん。

疑問形だけど、でも。それ、絶対私に拒否権ないよね。

「じゃ、ごめんね流雅くん。陽埜ちゃん、借りてくよ」

ほら、私何も言ってないでござるよ。

…いかん、お気を確かに陽埜。

これから私は、デンジャーの集合体とご対面しなくちゃダメなのだぞ。

これしきで倒れてたまるかつ！

そう、この萩原陽埜をナメてもらっちゃ困りますわよっ！
だいたい、私は流雅のものじゃないっ！

「テレポートするよ」

優しい言葉遣いで副会長様が呟かれた途端、私はガラス張りの豪華な部屋に立っていた。

：テレポートすげえ。

向かい側に、机と3人のシルエットが見える。

中心の大きな机に座る堂々とした影と、向かい合わせに配置されているソファに座る二つの影。一つは気だるげに机に脚を乗せていて、もう一つは長い脚を優雅に組んでいる。

ガラスから入ってくる光が、私から見ると逆光になっていて、シルエットの顔が暗くて認識し辛い。

でも。わかった。

だって、副会長様はおっしゃった。生徒会室に行くのだと。

それに、野生の本能ってやつですね！ 私には、身に迫る危険が、前方からビンビン伝わってくるのです！

「ただいまー」

副会長様が、私の首に巻きついたまま上機嫌に言う。

いや、そろそろ離してほしいですよ私も。でも、さっきの野次馬みたく、空気でごっ飛ばすなんて、チキンな私にできるわけがない。

どうしよう、と顔を強ばらせると、はあ、と溜め息が聞こえた。

なっ!?

私何かしましたでしょうか!?

何がお気に召さなかったのでしょうか!?

焦る私。でも、表情には出さない。うん、プライド的に。

無表情だとよく言われるから、集会でビビってたのも、バレてなかったらいいんだけども。

「何してんの」

机の彼から呆れたような声が。心地よいバリトンのそれは、確かに聞き覚えがある。

「かいちよーお。羨ましいー?」

そうです、会長です。

山吹生徒会長様ですっ!

「セクハラじゃないか」

きっとこの甘みのある軽やかな声は、安齋生徒会会計様。

「やっぱ俺、アイツとやっていく自信ねえ…」

このバスの渋みのある声は、木ノ内書記様だな。

「萩原さんが困ってんじゃない」

「え？ そんなことないよ？」

いや、その通りです会長。
困ってます。

「最近ほんとに瑠架が同い年なのか、疑問に思うな」

「俺は前から思ってたけどな」

「瑠架」

「…しょうがないなあ！」

そんな声と共に肩に乗っていた腕がなくなって、私はひっそりと
安堵の溜め息を吐いた。

てゆうか、私なんでここにいるんだろう。いろんな意味で。

「ちょっと暗いよね」

呟くと生徒会長様が立ち上がって、手を一振りした。すると、私
の向かい側のガラス張りの窓にジャッとカーテンがかかり、私の横
の壁でパチリと照明のスイッチが入った。

おお、流石。

物体操作の山吹紫苑様。

「うん、これでいいかな」

満足げに頷くその端正な顔が、今度は鮮明に見える。

いつの間にか、佐久良瑠架は木ノ内燈眞の隣に座っていて、話しかけてはちよつと鬱陶しそうにあしらわれている。

「手から炎だして、ファイアーっ！てして」

「なんでだよ」

「してよー」

「うるさい」

「そんなこと言ったら、どっかに飛ばしちゃうからねっ」

「はあ？ もういい加減黙れよ」

「わーん、柚生ー！」

なんだか、佐久良瑠架が不憫に思えてきた。
でも、年がら年中あの調子じゃ、ちよつとめんどくさそうだ。

「萩原さん、ちよつとこっちに来てくれる？」

その声に視線を山吹紫苑に戻す。彼は、安斎柚生たちが座っているのとは別の、ソファを指し示した。

なんだか、編入初日が長いです。

編入 3 (後書き)

お気に入り登録ありがとうございます！

今回、けっこう自信ないです…

大丈夫かなww

編入 4

「萩原さんには、生徒会秘書として副会長の仕事をやってもらうつて言っただでしょ」

ヤクザ様だなんて微塵も感じさせない穏やかな雰囲気で、彼は言った。

了承してないけどね、と私は呟く。

「今まで瑠架の仕事は、俺たちが分担してやってきたんだけど、ちよっとそれじゃ人手不足で」

困った様に笑う彼には、なんとなくこちらの警戒心を解かせるような雰囲気がある。

しかし、そんな山吹紫苑はテポドン級の爆弾を投下した。

「今回、殺し屋として名高い君に、俺たちの”仕事”を手伝ってもらったことになった」

ああ、なるほど、殺し屋の…

は？

私は口をあぐり開けた。

いきなり過ぎて、さらりと言われ過ぎて、思わず納得するところだった。

今、私のトップシークレットを、こいつは軽々と言わなかったか。

え。何故知ってんだ。

私が隠している…ってか誰にも言ったことがなく、証拠も完璧に隠滅しているそれを…っ！！

てか、仕事を手伝う…って、何を！？

麻薬を売りさばくとか、スイッチ入ったときはともかく、口を割らせる拷問とか、私できないっすよ！？

「丁重にお断りします」

用件がそれだけならさっさ帰ろうと、私は立ち上がった。

「じゃあ、しょうがないか。ほんとは、こんなこと言いたくなかったけど」

いやな予感がする。

ピタリと歩みを止め、振り向く。

わざとらしい悲しげな表情を作っているヤツに、私は見事に固まった。

え。

何ですかっ。

家族がどうなってもいいのか、とかそういう感じですか！？
脅しですか会長おおお！！

顔をひきつらせる私を見て、トドメにヤツは呟いた。

「……ゴシックカルマ」

なっ!?

な、な、な

「イヤアアアアアア!!!!!!!」

発狂した。

耳を塞いで首を振る。

私は、そんなパターンの脅しに対する術を持っていませぬ!

さらに、山吹紫苑は口を開く。

「…カラミティレクイエム」

「ぎゃーっ!」

「ほんとに嫌なんだね。いいじゃん、かっこいいよ。俺も二つ名欲しいくらいだ」

笑ってんじゃねえよ!

バカにしてんのか貴様っ!

お前は知らないんだよ!

この名前が、アメリカの新聞につけられた時のあの憎悪を!

この名前が、仲のいい友達の口から発せられた時のあの戦慄を!

「やめてくださいっ! 何故それを知って…!?!」

殺し屋として、情報がばれるなんて有り得ない。失格だ。もう最悪。

ほんと、私こんなとこで何やってるんだか。

「瑠架が、情報屋の息子だからね」

嫌がる私を面白そうに見つめ、山吹紫苑は佐久良瑠架に視線を移した。

それに気がついた佐久良瑠架が、ヴウン…とレポートし、いきなり私の腕に絡みついた。

「もっと知ってるけど、聞く？」

「やめてください」

即答すると、けらけらと笑って彼は私の腕から手を離した。

「ともかく。萩原さんには、聖セレスティナ生徒会の”仕事”をしてもらいたい。これが仕事の目的と内容だ」

山吹紫苑から、すっと差し出された紙。

私は嫌々ながら、それを恐る恐る受け取って、目を通した。

【聖セレスティナ学園生徒会執行部の存在意義及び任務について】

●はじめに

聖セレスティナ学園は、裏社会での秩序を乱すものを許さない。

聖セレスティナ学園は、表の皆様が安心できる裏社会を作り
上げることが目標としている。

.....

.....

.....

●目的及び役割

聖セレスティナ学園生徒会執行部は、本校の卒業生が安心して裏稼業に専念できる環境をつくること、これを第一目標とする。

聖セレスティナ学園生徒会執行部は、本校内及び聖セレスティナ学園が所有する敷地内での不正行為を取り締まる権限を持つ。

聖セレスティナ学園生徒会執行部は、裏社会での警察である地位を持つ。極悪を取り締まることをその意義とする。

聖セレスティナ学園生徒会執行部は、よって人を裁く権利を有することとする。しかし、これは校長の同意を得ることを定める。

聖セレスティナ学園生徒会執行部は、表の皆様に対して、裏社会の誤解を招くような輩はこれを認めない。即刻始末せよ。

聖セレスティナ学園生徒会執行部は、よりよい裏社会を築き上げることに努める。

.....

.....

.....

●任務内容

薬物や暴力、その他外道な行為は、これを認めない。

.....

.....

.....

つらつらと、理解不能な言葉が並べたくられているそれを黙読している、頭痛が酷くなったため、途中で断念。

眉間にシワを寄せる私を見て、山吹紫苑は分かりやすく要約してくれた。

うん、できれば初めから、そうしてほしかった。

「つまり、俺たちは、裏社会の秩序を乱す者を捕まえる役割を担っているってことなんだ」

.....

「はあ…」

裏社会に秩序とかあるのか？

それを、裏社会の実質一番怖い人代表のあなたが捕まえる？

……よく意味がわからないな。いや、わかりたくないな。

血みどろだよ、血みどろ。

流血だよ、流血。

生返事を返したら。

「極悪を取り締まる生徒会は、裏社会の警察的な立場で」

極悪？

ああ、あなたたちのことか。

極悪が極悪を取り締まってどないすんねん。大規模な生きるか死ぬかの、ただの弱いものいじめではないか。

またも訝しい顔つきになる。

山吹紫苑は、そんな私にどう言えいいのか迷っているように、視線をさまよわせる。

「まあ、つまり危険のない良い裏社会を作っていこうってことなんだ。だから、俺たちは表の敵じゃないってことを知っておいてほしい。それに、裏社会がないと表社会も動かないんだよ。本来の裏社会は、イコール悪いものじゃなかったんだ。本来の裏社会を取り戻す。それを手伝ってほしいんだよ、君の実力を見込んでね」

にこっと人が良さそうな笑みを浮かべて、山吹紫苑は首を少し傾けた。

「どうかな？」

なんだか、山吹紫苑のいいたいことが、わかるような気がした。あくまで、気がしたただけだが。

でも、言ってやりたい。

裏社会に、良いも悪いもないと思います。

危険のない裏社会とか、あるわけないっす。

薬物も暴力もない裏社会って逆に何？

それ、ほんとに裏社会って言えるの？

まあ、とにかく。

私は死んでもやらない。

何故私があなたたちと裏社会の秩序とやらを守らなきゃいけないのよ。

私は暗殺について学びただけで、そんなデンジャラスなパーソンとデンジャラスなデイズを過ごしたいわけじゃないのだ。

そうだ。だから、……いくら二つ名を使って脅されようと……脅さ、れ……ようと……

『カラムיתיレクイエム』

脳裏にふと、先ほどの悪魔のような笑みが浮かんだ。

くすり、と笑うその声が耳に纏わりついて離れなくなった。

その単語は、頭の中で何度もエコー&リピート。

カラムיתיレクイエム……

カラムיתיレクイエム……

カラムיתיレクイエム……カラムיתיレクイエム……カラムיתיレク

イエムカラムיתיレクイエムカラ————

「ぜひ、やらさせてください」

————あれ？

私今、何て言った……？

信じられない思いで固まって、思考を巡らす。あれ？あれれ？
今、もしかして、自分、何か、血迷ったことを言ったのではないだ
ろうか…。

「わ、よかった！ありがとうございます！」

ふわり、ととろけるような甘い笑顔で、山吹紫苑は言った。すご
く喜んでいらっしやいます。

……いや、間違い。

やりたくないです。

なんて、こんな笑顔を見せて喜ばれた後じゃ、口が裂けても言え
ない。でも、言わなきゃ。

ごめんなさい、間違いでした、お断り申し上げます、と。丁寧に
誠意を持って！

いくらなんでも、断った瞬間に首と体がオサラバするなんて急展
開はないだろう。

あれ、おかしいな。目から大量に汗が湧き出てきたよ。大洪水だ。
どうしよう。

「良かったじゃねえか、紫苑」

木ノ内燈真も、無表情ながらに少し口元を綻ばせている。

やめてください。

そんな目で私を見ないで！

「これで仕事もはかどるな、燈眞」

解放された感バリバリの表情で安齋柚生はため息をはく。

「やった！美人と一緒に仕事だー」

「瑠架は仕事しないだろ」

「俺の仕事を代わりにやれ」

にこにこ会話に花を咲かせる生徒会の皆様。
私は冷や汗がだらだらだった。

は、速く言わなきゃ…！

「うん、ほんとによかったよ。ニューヨークでの噂は聞いていたしね」

「けっこうセレスティナでも話題になってたしな」

「そんなに前から狙ってたのかよ？」

「まあね」

「かいちよー、すとーかー」

「……瑠架にだけは言われたくないかな」

「確かに。胸に手をあてて考えてみろって、さっきから言ってるだ

ろ」

「まだ自分が変態だって認めてねえのか」

「うわあああん！」

上から、山吹紫苑、安斎柚生、木ノ内燈真、佐久良瑠架の順。

その会話に、私は曖昧な笑顔で固まっていた。

……引き返せないぞ、陽埜。
どうする陽埜。

何故、口走った。

何故、脅しに挫けたのだ！
自分自身に失望だよ。

どうしてこんな目に！
いや、今からでも遅くないはず！
一か八か！ 当たって砕けろ！
すう…と息を吸い込んで――

「ごめんなさい私――！」

「ようこそ、聖セレスティナ学園生徒会へ」

――あれ。おかしいな。
言えなかったぞ。

山吹紫苑に遮られたぞ。

私の命がかかった一大決心を！

山吹紫苑を見れば、彼は えへっとでも言いそうな勢いで笑っている。

まさかこいつ…！！

わざとかっ！？

真剣な眼差しで私を真っ直ぐ見て、山吹紫苑は、口角をキレイに持ち上げた。

「ごめんね、萩原さん。君がいないと困るんだ。

やめさせてなんか、あげないよ」

ぞぞぞぞ…っと、体中に鳥肌が立つのがわかった。

いや、そんなセリフを吐けるお前にもびっくりだし！

これから人生が、きつとワンダフルすぎて悪寒だし！

「萩原、諦めたほうがいいぜ」

木ノ内燈真が、ぼそつと呟いた。その視線に哀れみが混ざっているのは、気のせいだと思いたい。

「そうそう。瑠架に、プライバシーの欠片もない情報を口にされる前に、な」

木ノ内燈真の言葉に頷いて、安斎柚生が恐ろしいことを言った。

プライバシー…！

殺し屋の私のプライバシーがだだ漏れなのですね！？ それは殺し屋として死活問題だよ！

というか、そういう問題じゃなかったー！

私の一体、ナニがバレているのですかっ！

知りたいような、知りたくないような！

いや、知らぬが仏！

「言っちゃってもいい？」

てめえは黙っとけ！

楽しそうな笑い声をあげる佐久良瑠架を本気で殴りたくなった。

悪くないよね。

と、山吹紫苑が立ち上がった。私はびっくりして、慌てて仰け反る。

「モットーは！」

叫んだ生徒会長。

対して。安斎柚生は苦笑し、佐久良瑠架はノリノリで立ち上がり、木ノ内燈眞は無言で山吹紫苑を見た。

え、何。

何が始まるのですか。

「安心をあなたに！ 清い裏社会をお届けします、生徒会です」！
「！！」

息ぴったりで言う生徒会の皆様。

.....

.....

.....

…うん。

………で？

………。

あ、そうなんだ。
へえ。

………。

…あ、もしかして、私に突っ込みを求めていらっしゃるのですか？

はい、わかりました。

仕方ないです。

生徒会秘書だって？ ああ、そうですか。 やってやるよ！ この際、私何だってやってやるわよ！

「――選挙かつつ!?!?!?!?!」

編入 4 (後書き)

お気に入り登録、感想ありがとうございます！

とても励みになります！

遅刻

ジリリリン。

けたたましい時計のベルが鳴り、それを手でおもむろに探り当てる。

…うーん。

開かないまぶたをこじ開けて、霞む視界で見た時刻は6…00。

……はーあ？6…00だと？

もぞもぞと再度布団に潜る。

私、なんでこんな時間に目覚まし鳴らしてんの？ついにばか？

任務はいつとも夜中だし、こんな朝早く起きる必要はないし、今

日は特に何の予定も――…

そこまで考えると、何かが寝起きの頭に引っかかった。

…なんだっけ。

何かあったっけ。

うーん。

まあいいか。眠いし。

睡魔は何事にも勝るのである。
うん、てことで寝よ。

―――…

リリリン。

…リリリン。リリリン。

リリリン…。

…うるさいなあ。

けたたましく鳴る音に手だけを布団の外に出して、
またしても私は目覚ましを探り当てようとする。

あった。

それに、バシッと手を叩きつける。

リリリン。

ん？ ミスったか。

バシッ。

リリリン。

バシッ。

リリリン。

バシッバシッ。

リリリン。

……ああん？

リリリン。

仕方がないので、のそりと起き上がると、目覚まし時計は鐘の部分が半壊していた。：おかしいなあ。私の手って、そんな若干凶器みたいな代物だっけ？

リリリン。

まだ鳴ってる。

：鳴ってる？

や、違う。携帯だ！

急に目が冴えた私は、慌てて携帯を開く。

『Hello! Good morning, my sweet girl! Hiino! まだ寝てたのかしら?』

受話器の向こうの無駄にハイテンションな声。私は、朝から少し疲れた気分で応える。

「ああ、お母さん。寝てたけど：どしたの？」

『あんた、まだ寝てて大丈夫なの？そっち、今何時よ?』

「7：00だけど：今日は特に予定ないから大丈夫で——」

『学校は!?!』

私を遮って、慌てたようなお母さんの声がする。

…ああ、お母さん今ポストンにいるんだっけ。…ポストンとの時
差って、いくつだっけ……てか…眠いなあ…。

って、え?!!

「学校!?!」

* * *

能力で大気を縮める。1歩を10歩にする。走る。やばい、遅刻
する!

制服のボタンを閉めながら、ウィダーをくわえる。

ついでに靴下をはいて、スクバを肩にかけた。

残念ながら、チコクショックパンマガリカドのイベントは発生致し

ませんよ。期待しても無駄です。

いや、こんなピンチで発生したら、手をさしのべられようとなかろうと、それどころか私は問答無用でヤツを張り倒して学校へ行きますがね!!

なんて、考えていたら。

「きゃ！」

そんな馬鹿な!

曲がり角で何かにぶつかった。

…って、はあ!?

いや、違うよ! やめてよ!

今のはフリじゃないよおおお!!

「いっ！」

スピードがついていたのもあって、私は宙へ投げ出され、コンクリートに転がった。

「…っわ、ごめんなさい」

慌てて立ち上がり、その人に謝る。

「ぶつかってんじゃねえよ！」

叫んだ声は、男。ってか、完璧年下。

そのまま走り出そうとしていた私の足は、少し止まった。

「しかも、すごい勢いだしっ」

キッと私を見上げた彼は、14歳ぐらいで、すごい整った顔なのに、なんだか生意気そうな印象だ。涼しげな目許は、将来すごい男になりそうな感じ。スリーピースのスーツを着て、なんだかお坊ちゃま風。

「……き、きいてんのかっ」

……。

ああ、やだやだ。

金持ちの息子ってば、やっぱり高慢知己ね！

「ごめん、ほんとごめんね。じゃ、私急いでるんで」

申し訳無さそうな顔を作って、彼の腕を強引に掴んで立たせる。

そして、じゃ、と手を挙げて私はまた走り出した。

しゃあないよ、遅刻は厳禁。

チコクシヨクパンマガリカドの魔法はこりごりですっ！
というか、こういうイベントはもっと先だと思えます！

＊ ＊ ＊

「せーふっ！」

しゅたっど舞い降りた私に、クラスのみんながびっくりしたように目を見開く。

え、今どこから現れたんだ？ 的な目線をスルーする。
その時、ジャストでチャイムが鳴った。

うわ、やば、超セーフ！！

良かった良かった。

1日目から遅刻とか、印象悪すぎるもんね！
私の能力がこれで良かった！

ほんと、安堵の溜め息を吐きながら自分の席に着く。

「今、どこから現れたんだ？」

お、流石私。

視線の意味を一言一句、違わずに受信するなんて、ただ者じゃないわね！

…って、そうじゃなかった。

こっちを、興味深そうに見ているのは、隣の席の安齋柚生さんです。

てか、あなた隣の席だったとは。

彼は色素の薄い目で、私をけだるげに見ている。

おっと、まだ私はあなたたちが怖いわけでありますので、そんな

に凝視してくるのはご勘弁願いたい所存であります！

「あ、えと、大気を圧縮しまして、その凝縮された空間から来たんで、突然現れたように見えただと思います、はい」

縮こまって言うと、彼は聞いてきたくせにあまり興味がない感じでふーん、と頷いた。

「仕事も期待できそうだな」

流し目でそう言った安斎柚生に、身が総毛立った。

いやああああ！

無駄に色気を振りまくな！

そして、仕事に期待をしないでえええ！！

がしっと自分で自分を抱きしめて、私は慌てて正面へ体を戻した。すると、感じる視線。

……穏やかに見ている山吹紫苑。くすくす笑う佐久良瑠架。無表情の木ノ内燈真。

何見とんじゃワレえ！！

ガンつけ返す私のほうが、立派にヤクザっぽいなんて、私はまだ気づいてなかった。

「はい、授業を始めます」

——初日はまだまだ始まったばかりだ。

遅刻 2

「萩原さん。何か忘れてること、ない？」

そう、山吹紫苑が私に問いかけてきたのは、放課後のことだった。

忘れてる、こと？

突然のその言葉に、私はうーん…と、頭をひねる。

ええーっと、なにかありましたっけ？

……ニューヨークの友達への手紙は書いたでしょ、依頼は暫く受けないって『nandemoya』にも言ったでしょ……、
ほかにあったかなあ？

…思い出せない。

そろり、と山吹紫苑を見上げる。そして、私は瞬時に、山吹紫苑を見たことを後悔した。

顔が怖いっす。超絶に。

人類のフェイスを超越してるっす。

笑ってるんだけど、でも、なんかにじみ出てるのよ！ 出ちやいない、黒色のものが！

言えない。言えないよ！

思い出せません、なんて言えないよー！！

山吹紫苑は、ただ口元だけで穏やかに微笑んでいる。怖い。

「思い出せないの？」

首を傾げて、彼はまたもや問う。

どうしよう。次こそ、爪とか剥がれたりしちゃうんだわ。

私は、尊い爪の犠牲を覚悟で、恐る恐る頷いた。

「……………す、すみません…」

「そっかあ…。覚えてないかあ…」

へえー、と山吹紫苑。

そう、デンジャラスパーソンその壺の、山吹紫苑だ。

怒らせちゃいけない人代表、我らが生徒会長様の山吹紫苑だ！

あはは、私ってば、冷や汗がまるで滝。

ごめんなさいっ。

でも、ほんとにわかりません！

じっと山吹紫苑が見てくる。

私は怯えながら、山吹紫苑を見つめ返す。

そんな気まずい沈黙が支配する中、渋みのあるバスが響いた。

「明日7時に生徒会に来てくれと、昨日言っただろうが」

あら！木ノ内燈真さまだわ！

…て、え？

……………なんですと…。

——『明日から仕事してもらうから、朝7時、生徒会室に来てね』

昨日の集会で、そう言って立ち去っていく山吹紫苑の背中が、今はつきりと蘇った。

……………。

…言われたような。

いや、言われてるよなあ。

だめですね、自分。

どうにも最近弛んです。

殺し屋の恥です。

……ほんと、だめですね。

恐怖で体がガタガタ震えてきましたよ。

よよyOヨし、あyaまロ宇！（よし、謝ろう！）

「ほんとごめんなさい！ すっかり忘れてました！」

「朝も遅れてきてたよな、何か用事でもあったのか？」

「いえっ、そういうわけではっ」

優しい声と言葉と共に、安斎柚生が言い、私は慌てて否定する。

普通に寝坊で御座います！

すみません！自己管理がなってない、だめ女ですみませんんん！！

「なら、別にいんだけど」

彼は怒ってないみたいで、少し安心した――のも束の間、

「俺、言ったよね？仕事してもらいうからって」

ひいひい！！

山吹紫苑は、完全ご立腹です。

「瑠架は瑠架でいいしさ」

どうりで、テレポートで急に現れて巻きついてこないわけです。

彼の行動パターンは、もう大体把握しましたよ。

「また逃げやがって、あいつ」

「嫌なことがあったら逃げるとか、一体何歳なんだよ」

木ノ内燈真は、仏頂面のまま少しイライラとした声を出し、安齋
柚生はそれに頷く。

ちよっと思ってましたけど、仲いいよね、この2人。

一見、正反対なのに。

「……どうしようかな」

人差し指を唇の辺りでさまよわせながら、山吹紫苑は悩む仕草をする。

う。

なんでしょう。

爪くらいなら、もう覚悟はばっちりなのですが、私の爪とかいりませんか？

「：しょうがないよね。来なかった萩原さんが、悪いんだよ？」

何か思い立ったらしい山吹紫苑は、にや、と悪い微笑みを浮かべた。

なんだか、デングジャラスパーソンさが増したね、山吹よ。

そして、彼は、ほんとはもっと初歩的な仕事からやってもらうはずだったんだけど、と前置きをして。

言った。

「しょうがないから、萩原さんには族の撲滅に行ってもらいます！」

「えっ！」

「何か文句でも？」

「いえっ！」

あんな顔で睨まれて、文句など言えるわけない。思わず、即答で否定である。

無言の圧力を感じたぜ☆

ビンビンとなっ！

はい、そうです、私がチキンです。

「といっても、今日は主に見学をしてもらうつもりなんだ。俺らが普段、どんな風に仕事をしてるか知ってもらって、それから、生徒会の責務についてのさらなる理解を得ていただこうかな、と」

……左様ですか。

私が生徒会について、全く理解を示していない、つまり、その仕事内容を訝しんでいて、あまり協力的でないこともお見通しなので御座いますね、生徒会長様。

ますます怖いぜ、山吹紫苑。

「というわけで、一応萩原さんは、副会長の代理みたいな感じで生徒会に入れたから、瑠架の仕事を見学させたかったんだけど。その瑠架がいないんだよね」

「そうですね……。どこに行かれたんですか？」

ちょっと疑問に思ったので、問いかけると。

「家にでも帰ったんじゃないかねえの」

「すでに帰ったな、きっと」

「もう帰ったんだと思うよ」

木ノ内燈真、安斎柚生、山吹紫苑が同時に言う。

あ、帰ったんだ……。

なんか、やっぱりフリーダムなんだな、あの人。

「……呼んでくるのも面倒くさいよな」

疲れたように言う安斎柚生。

なんだかあなた、苦勞してそうですね。

私が秘書になると決まったときも、仕事が楽になるってすごい期待してましたもんね。

「…ああ」

頷く木ノ内燈真。

あなたは、案外無口ですよ。奇抜な赤色の髪の手をしていながら。

「だから、俺について来てもらおうかな」

と、山吹紫苑。

あなたは、柔らかな物腰で、さらりと言ってはいけない事をさらに言うのけますよね。

ですから、私はそれを咀嚼するのに時間がかかって……

……………。

…なんですと！

山吹紫苑と仕事だって！？

いやー、あの、いきなりデングジャラスパーソンその壺と2人きりつつうのは、荷が重いつつうか、なんつつうか……っ！

「俺、平和主義だから安心してよ」

にこ、ときれいな顔を崩して笑った山吹紫苑に、私は言い知れぬ不安を抱いた。

「こりゃ、トラウマになるんじゃないか？」

「否定はしねえ」

安斎柚生と木ノ内燈真がそう囁いているのが聞こえて、私の不安はますます肥大化した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0812w/>

＼M!RaCle G!RL！／

2012年1月13日01時51分発行